

(京都)

龍谷大で追悼法要

被災の教授講演「支援生きる力に」

龍谷大深草キャンパス(京都市伏見区)では15日、阪神大震災の追悼法要があった。震災では、当時2年生だった女子学生が神戸市東灘区の自宅で犠牲となっている。自身も被災した文学部の鍋島直樹教授(55)が「悲しみから生まれるもの」と題して学生ら約1500人に講演し、体験などを通じて実感した生きていく意味などについて話した。



阪神大震災での経験について語る鍋島直樹教授
＝伏見区の龍谷大で

中央区にある浄土真宗本願寺派の寺の副住職。「突き上げられるような揺れで、扉や山門が倒壊した。大変怖かった」と発生直後を振り返り「多くの支援をいただいたことを忘れた

ことはなく、生きる力となった」と話した。「あらゆるものが移り変わりともまらない」ことを意味する仏教の「無常」の考え方について「壊れた街を見てなかなか受け入れることができない時期もあったが、『同じ状態が続かない』ということ、は、どれほどつらくて

も支え合えばいつか必ず復興できる希望もある」と力を込めた。

また東日本大震災の後に被災地を巡った経験も語り、ある遺族の「悲しみは消えることはないが、生き残った者にはそれぞれ必ず役割があると思うようになった」との言葉を紹介。「人は亡くなると姿形が見えなくなる。しかしその人から受けた愛情や、その人にささげた愛情を忘れないでいることができるのは、今ここに生きている自分自身だけ」と締めくくった。

【花澤茂人】